

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成23年3月28日

財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科 精神医学

職名・学年 博士課程3年

氏名 川岸 久也

事業区分	平成22年度・中期派遣助成		
研究課題名	自閉症児および広汎性発達障害児への効果的な早期介入法		
受入機関	アメリカ合衆国ノースカロライナ大学ウィルミントンTEACCHセンター		
渡航期間	平成22年8月21日 ~ 平成23年2月14日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要/報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 無 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	1,350,000円	
	使用した助成金額	1,350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳 (使用旅費の内容)	日本・米国間 航空運賃及び諸費用	285,000円
		交通費(アメリカ国内)	50,000円
滞在費		1,015,000円	
不足分は私費を使用			

平成 22 年 8 月から半年間、貴財団の援助を受け、自閉症児および広汎性発達障害児への早期介入について、米国ノースカロライナ州ノースカロライナ大学ウィルミントン TEACCH センターにて学んだ。発達障害児、特に自閉症児に対して 3 歳までに特別な指導を行う早期療育は Dawson et al. (2010) のランダム化比較試験によってその有効性が証明され、現在全米規模で研究と実践がなされている。さらに Odom et al. (2010) により、様々な手法をもとに実践された報告とその効果についてのメタ解析が行われ EBP (Evidence Based Practice) に基づいた介入の実践に向け、研究が進められている。

今回、私は TEACCH で早期療育を学んだ。TEACCH (Treatment and Education of Autistic and Communication related handicapped CHildren) とは、Eric Schopler により創案されたノースカロライナ州で行われている自閉症に対する援助プログラムのことであり、自閉症者の視点にたった援助や、コミュニケーションを重視する指導、構造化された指導、保護者を共同治療者として連携をとることを重視して支援を行っている。TEACCH 部には早期療育のプロジェクトについて、ノースカロライナ大学を中心とし研究を目的として Linda Watson らが中心となって実践しているグループと、早期療育のサービスシステムの確立に向け臨床的に実践している、今回滞在したウィルミントン TEACCH センターのような地域のセンターを中心としたグループがある。研究を目的として実践する場合は、十分な予算と協力者を背景に子どもに対して十分な時間を療育に充てることことができる。実際、効果があげられたと報告されている先行研究のほとんどが週 15 時間以上の療育を行っている。しかし臨床的に行う場合は、研究費などの予算的なバックアップがないために収入に見合ったサービスしか提供できず、どうしてもそこまでの時間を療育にかけることができない。

ウィルミントン TEACCH センターの早期療育のサービスは、子どものいる家庭におおむね 3 回以上訪問する Home Teaching プログラムと、センターに週 1 回来所して 1 時間半程度受講する療育のプログラムから成る。これらのサービスで発生する費用はそれぞれの子どもが加入する医療保険が負担する。保護者を共同治療者とする TEACCH では家庭での療育の実践も重要であると考えており、家庭に訪問して保護者から子どもについての情報を得るだけでなく、子どもの抱える問題点を家庭のその場で観察して対応を練り、そして家庭内を構造化して子どもがより適応的に活動しやすくなるような指導も行っている。センターに来所して療育を受けるプログラムは週 1 回、5 週間の計 5 回からなるが、おおむね子どもが満 3 歳になるまで (満 3 歳以上になると、発達障害児のための通園施設もしくは地域のプリスクールに通う子どもが多い) その後も続けて来所する。センターでは 2~3 名の子どもが同時に療育を受ける。保護者は子どもと同じ部屋にいて、セラピストや他の保護者と情報交換をしたり、時には子どもへの療育に参加したりする。日本の療育機関での療育では保護者は別室で待機することが多いが、保護者を共同治療者として重視するため、ここでの療育では同席する。

療育中、子どもはコミュニケーションの向上を目的とした課題のコーナー、微細運動の向

上を目的とした課題のコーナー、自立して課題を進めるコーナーの3か所を回る。課題は、子どもの発達レベルに応じ、なおかつ子どもの興味のあるものを選んで進めていく。コーナーからコーナーの移動については、それぞれのコーナーにある特徴的な課題に必要なアイテムを手渡されることで自律的に移動する。TEACCHでは課題を進めるうえで、構造化を重要視し、課題そのものが工夫され、連続してやり遂げやすいように整理して配置されている。子どもの目標は、それぞれの子どもによって異なり、一概に表現することはできない。子どもにより発達のレベルはさまざまであり、コミュニケーションの能力もさまざまである。子どもによっては、発達指数で表されるような発達レベルとコミュニケーションのレベルが大きく乖離しているようなケースを頻繁に見かける。手先が器用であっても、指差しを理解できず使用もできないような子どもが数多くいる。コーナーを3つに分けている理由としては、子どもにとってはそれらのコーナーで何をするか理解しやすくなり、セラピストにとっては、コーナー毎で子どもの発達に見合った課題を準備しやすくなることがある。コミュニケーションの発達においては、共同注視と模倣遊びを重要視し、それらが萌芽して獲得できるような課題が準備される。

療育そしてその後のサポートで重要なことは、綿密な支援計画を立てることである。保護者との面接に加え、子どもの行動を細かに観察することで子どものレベルを見極め、援助につなげていく。こうして作成された支援計画は、療育中のみならず療育中の成長も加味され、その後の子どもの生活に援用される。

自閉症並びに広汎性発達障害の早期療育は、早期発見の下に行われる。しかし、現行のDSM-IVやICD-10の基準では、診断は3歳以降に行われないと行われぬ。では、1歳や2歳、時には0歳の子どもの発達をどのように評価するか？これが課題である。ウィルミントンTEACCHセンターでは、コミュニケーションおよび対人関係を構築する能力と、他の能力を比較してスクリーニングしていた。全般的に発達が遅れていたり、年齢が低かったりするケースでは、子どもの持つ能力の評価が難しいため、ひとまず早期療育に参加し、そのあとで診断を行うようなケースもあった。如何にして自閉症や広汎性発達障害が疑われる子どもをスクリーニングするかについては、現在世界的に課題となっているところであり、研究としてもトピックとなっているところである。

本中期派遣助成で得た知見と実践経験および、センターや大学のスタッフとの関係を今後の研究に生かしていきたい。貴重な助成を与えていただいた京都大学教育研究振興財団様に感謝いたします。